

京都大学	博士（文学）	氏名	吉 琛佳
論文題目	再想像された「近代」：日本と中国のウェーバー受容と東アジア社会科学		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、ドイツの社会学者マックス・ウェーバーの日本と中国における受容史に関する比較研究であり、それを通して東アジアにおける社会科学的知の形成過程やその存立条件を考察する試みである。</p> <p>日本や中国においては、同じく遅れて近代化を開始したドイツやロシアの場合と異なり、自分たちがヨーロッパ社会の「他者」の位置に置かれているという認識が近代社会認識の出発点となった。東アジアの思想史や社会科学史にはこうした歴史的背景をもつ共通の特徴が認められる。最も影響力の大きな古典的社会学者の一人であるウェーバーは、近代化の途上にある社会にとって、自らの「近代」像を描き出すにあたって参照・対決が避けられない存在であった。また、ウェーバーはその比較宗教社会学において東アジアを含む多数の文明地域を研究対象としたため、ウェーバーを読む東アジアの知識人たちは「西洋近代」だけでなくそれに必然的に内在している「オリエント像」と対面しなければならなかった。それゆえ、東アジアにおける近代社会思想の確立過程はウェーバー受容に関するケーススタディを手がかりとして解明することができる。</p> <p>第一部ではまず、「近代」と「アジア」の捉え方の問題に焦点を合わせて日本と中国におけるウェーバー受容の3つの事例を考察する。第一章では大塚久雄の戦時期ウェーバー受容を考察する。戦後の大塚の後に「近代主義的」と評された研究とは異なり、戦時期の大塚は近代社会の光と影の両面を同時に深く考え、ウェーバー研究に基づいて近代に関する二重の認識枠組みを確立していたことが、「総力戦体制」論者による大塚批判への反論を通して明らかにされる。</p> <p>第二章では戦時期日本におけるウェーバーのアジア社会論の受容を検討する。当時の社会学者のアジア社会理解もまた、後の「日本オリエンタリズム」批判で指摘されたように一元的なものではなかった。たとえば島恭彦はウェーバーの理論に潜んだヨーロッパ的なバイアスに立ち向かい、アジア的な視点からのアジア認識を確立することに努めた。ここまでの2章では、「近代」と「アジア」の問題をめぐる戦時期日本の社会科学の複雑性に注目し、アジア社会全般における社会科学の存立条件との関係を探ろうとする。</p> <p>第三章では中国に移り、代表的な思想誌『読書』に掲載されたウェーバーに言及する記事を系統的に分析することによって、1980年代以降の社会科学再建初期におけるウェーバー受容を検討する。中国におけるウェーバー研究は遅く開始された上に改革に伴う急速な経済発展とともに進んだことから、初期段階から多様かつ複雑な受容傾</p>			

向を示した。この時期の『読書』の記事を整理することで、ウェーバーの学説の解釈が5つに類型化される。

第四章では前の3章の内容を総合して、中国と日本におけるウェーバー解釈を規定した認識枠組みを解明する。筆者は両国におけるウェーバーに関する言説を検討し、そこから「近代の二重性」と「非西洋の二重性」という2つの価値関心に関する理念型を構築する。「近代の二重性」とは近代の特徴を「主体化と客体化の同時的展開」として捉える思考形態のことを、「非西洋の二重性」とは西洋起源の認識枠組みとその中で「後進的」と評価される伝統的知識体系との矛盾を指す。非西洋の知識人は自社会の近代を思索する際、常にこの2つの二重性に起因するディレンマに直面しながら思考を展開してきた。彼らが採りうる戦略は2つの二重性をクロスさせた4象限によって図式化され、啓蒙主義（主体化重視・西洋志向）、新伝統主義（主体化重視・土着志向）、文化ヘゲモニー批判（客体化重視・土着志向）、ポストモダニズム（客体化重視・西洋志向）として類型化される。

第二部では、日中両国におけるウェーバー受容を、ウェーバーとマルクスおよびマルクス主義をいかに関連づけるか（「ウェーバー＝マルクス」問題）という観点から捉え直す。いずれの国でもウェーバー受容に先立ってマルクス主義が受容されていたために、政治的・知的条件の違いにもかかわらず、マルクス主義が支配的な社会科学がウェーバー受容の文脈を形成したという共通性がある。第五章と第六章では第二次大戦後（1945年～60年代）の日本と1980年代の改革開放以降（「新时期」）の中国を取り上げ、両国の社会理論・社会思想における「ウェーバーとマルクス」を主軸とした言説を対比しつつ考察し、東アジアの「第二の近代化期」における社会認識の形成を把握することを試みている。

第五章では、戦後日本の社会科学においてマルクスとウェーバーの学説をどのように関係づけるかが重要な争点となったことを述べた後、大塚久雄と丸山眞男に焦点を合わせて彼らにおけるウェーバー＝マルクス問題が論じられる。二人ともマルクスとウェーバーの双方から影響を受けながらも、大塚の近代化類型論や丸山における中間集団の再評価に見られるように、近代化の主要な担い手の人間類型やエートスを重視するウェーバーの受容をその重要な基盤としていることが明らかにされる。

第六章では再び1980年代の中国に戻り、新啓蒙運動において「ウェーバー熱」と称されたようにウェーバーが精力的に受容された文脈ならびにそのマルクス主義との関係が検討される。この時期の中国で起こったマルクス主義のヒューマニズム的転回によってウェーバー受容が可能になる文脈が形成されたことを指摘した後、当時の知識人集団の社会的特徴を挙げながら3つの主要な思想的立場を類型化する。その上で、当時の中国のウェーバー受容の到達点を示すものとして、蘇国勲と汪暉の2人を中心に論じる。1980年代のウェーバー読解は、従来のマルクス主義の部分的相対化と近代化に関する反省的想像力の促進をもたらしたものの、こうした探求はウェーバーの西洋中

心主義を批判して代わりに「中国の立場に基づく近代化」を模索する傾向に結局は取って代わられることになった。

第七章では、これら2つの啓蒙思想が発生した社会思想的背景と知識人集団の存在様式を比較し、対照的な結果をもたらした要因を検討している。日本と中国の「第二の思想啓蒙」期（戦後日本と80年代以降の中国）には、前の時代の封建性への批判と「近代」的価値の再確立に対する希望によって特徴づけられる類似した知識人の観念図式が認められるが、両国のウェーバー＝マルクスをめぐる議論は最終的にはまったく異なる思想傾向をとることになった。日本では戦後の知識人が社会構成体の考察に行為者とそのエートスの次元に関する検討を導入することによって普遍的な近代的主体像を確立した。一方で中国での研究は「合理化」を主軸とするウェーバーの近代理解の普遍性に疑問を投げかけ、「ローカルな文脈を重視した近代社会認識」を構築する試みを展開した。

以上の考察を総合すると、ウェーバーの学説の受容過程は、日本や中国の社会が「近代社会」を再検討・把握し、その上で自国社会の近代化を再想像・再創造するという「第二の啓蒙」の過程と密接に結びついている。こうした基本的前提を共有しつつも、「第二の啓蒙」期における日本と中国の知識人のウェーバー受容は、「遠心的近代化」／「求心的近代化」と筆者が呼ぶ対照的な「近代化」の認識モデルを発展させた。すなわち、戦後日本の文脈では多くの知識人が「内面化された西洋の視点」から自社会を考え、議論する傾向がみられたため、戦後の社会科学は西洋の視点から日本社会を探求し、批判する言説として成立した。一方で改革開放後の中国社会では、啓蒙知識人が近代化を唱えた際、実は「外から」近代（西洋）的制度や文化を取り入れることによって、自国の伝統に対する改造・更新を提唱していた。社会学者たちは「自分の文化的伝統に基づく知識」をいかに継続させるかという問題意識から、社会科学的知識を自らの目的のために改造することにより関心をもっていたため、儒教を含む知的伝統の創造的変革を目論み、西洋の文化的ヘゲモニーに反発する傾向を示した。「第二の啓蒙期」における「近代」と自社会の関係性に関する認識のこうした根本的差異を背景として、両国では出発点の類似性にもかかわらずその後ウェーバー受容と社会科学の展開に絶大な分岐が生じたというのが筆者の結論である。

(論文審査の結果の要旨)

第二次大戦後に大きく進展したマックス・ウェーバー研究の成果を受けて、21世紀に入ってからにはウェーバーの研究史・受容史が独自の研究分野として成立し、アメリカやドイツ、フランス、日本など国別に受容史研究が蓄積されつつある。そうした研究状況にあって、本論文はすでに両大戦間期に世界に先駆けてウェーバーの著作の翻訳・研究が始まっていた日本と1980年代によく本格的なウェーバー受容を開始した中国とをケースとして取り上げた比較研究である。筆者は両国におけるウェーバー受容の特徴を比較することによって、非西洋社会における近代化と社会科学的知の導入ならびに独自の「近代」像の形成をめぐる共通点と相違点を明らかにしようとして試みている。その際、筆者の中心的関心は専門的なウェーバー研究の歴史よりも、むしろ日中両国の知識人ないし社会学者がウェーバーとの対話を通して「近代」についてのいかなる思考を展開したかという問題に向けられている。

本論文の出発点は、自国の伝統とは異質な西洋的知識の導入を通して社会の近代化を遂行せざるをえなかった非西洋社会において、知識人、特に社会学者が直面した二重のディレンマにある。筆者によってこの状況は「近代の二重性」（主体化／客体化）および「非西洋の二重性」（外来思想の内面化／ローカルな知的伝統の継承）と定式化され、それぞれの選択肢のいずれを選択するかによって、近代社会思想の受容に関して啓蒙主義・新伝統主義・（西洋の）文化ヘゲモニー批判・ポストモダニズムという4つのパターンが区別される。筆者は日本については戦時期と戦後1960年代まで（大塚久雄・島恭彦・丸山眞男ら）、中国については1980年代から2000年代にかけて（蘇国勲・汪暉ら）のウェーバー研究に注目してケーススタディを行った後、戦後日本の社会科学の主流は「啓蒙主義」から「新伝統主義」を経て「ポストモダニズム」へとという流れで整理できるのに対し、80年代以降の中国では同じく「啓蒙主義」から出発しながら「新伝統主義」を経て「文化ヘゲモニー批判」（中国固有の近代化の道の主張）へと至ったと結論づけている。

本論文が特に優れていると認められるのは以下の3点である。第一に、本論文は現代中国におけるウェーバー受容の概観を提供しており、中国のウェーバー受容史に関する本格的な研究がまだ存在しない状況にあって、研究の空白部分を埋める先駆的な論考といえる。1980年代の中国での「ウェーバー熱」と呼ばれたブームはポスト社会主義的状况によって生み出されたウェーバーへの関心の高まりを示す一事例であり、ロシアや東欧諸国でのウェーバー受容史とも比較しうるものである。本論文は「ウェーバー＝マルクス」問題をめぐる議論がマルクス主義を公式イデオロギーとする国においてたどった経過の分析としても興味深い研究成果である。

第二に本論文は、日中両国のウェーバー受容を比較した点でも類例を見ない研究である。しかもこの比較に際して、西洋出自の理論にどこまで普遍性を認めるのか、また西洋にとって「他者」である自国の文化的アイデンティティに対してどのようなス

タンスを採るのかといった、非西洋社会における社会科学的知のあり方に関わる普遍的な問題を中心に据えている点で注目される。この視点に立って筆者は、日中両国におけるウェーバー受容に近代化の要請と文化的アイデンティティのディレンマという共通の前提を見出し、両国の事例が対照的な経路に分岐していった過程を跡づけている。その際、筆者はポストコロニアル研究の視点に触発されつつも、戦時期日本のウェーバー研究に「総力戦体制論」や「日本オリエンタリズム論」の視点では捉えきれない複雑性・多様性を見出し、両国の分岐に至る過程が決して単調なものではなかったことにも注意を払っている。日本のウェーバー研究にも戦時期には後に中国で展開されるのと同様の西洋中心主義批判的な契機（筆者の用語でいえば「新伝統主義」と「文化ヘゲモニー批判」）が存在し、中国にも1980年代には啓蒙主義的関心からのウェーバー受容があったこと、こうした部分的な共通性にもかかわらず最終的には両国のウェーバー受容が異質なパターンに帰着したことは、東アジアに共通の歴史的・思想的文脈を見据えながら比較研究を行なって初めて明らかになる事実であり、これを大きなスケールで説明してみせたことが本論文の最も重要な貢献といえよう。

第三に、本論文は日中両国の知識人を対象とした知識社会学的比較研究としても貴重なものである。自国の知的伝統の継承への実践的関心が強く、社会科学の土着化を志向するに至る中国知識人の傾向は、西洋的な視点を内面化しつつ自国の伝統から批判的距離を置く日本のウェーバー受容のあり方とは著しい対照をなしている。こうした両国の分岐には、政治体制や知識人の社会的地位・役割の違いのみならず、中国では中国化されたマルクス主義が西洋思想受容の前提をなしていたという思想的文脈の違いなど、さまざまな要因が関わっていたことが示唆されている。

以上のような画期的意義をもつ研究とはいえ、本論文に問題がないわけではない。知識社会学的分析のための基礎的な理論枠組みが明示されておらず、そのために思想的考察に比べると社会学的分析があまり体系的なものとなっていないうらみがある。また、たとえば第五章で丸山眞男の中間集団への評価をウェーバーの影響に帰属させているところなど、資料による論証が万全とはいえない箇所も見受けられる。概してこの章での戦後日本のウェーバー受容の考察に関しては、戦時期のそれに比べて個々の学者への目配りがまだ不十分で、中国のウェーバー受容に関する考察と比べて平板な印象を免れない。しかしながら、こうした問題点は筆者の今後の研究課題とすべきものであって、本研究全体の意義を否定するものとはいえない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2023年1月27日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。